

## 機関拠点型基幹研究プロジェクト

### 「多様な言語資源に基づく総合的日本語研究の開拓」基本計画

平成28年 3月28日

人間文化研究機構

一部改定 平成29年 4月 1日

一部改定 平成29年10月 1日

一部改定 令和 2年 4月 1日

#### 1 機関拠点型基幹研究プロジェクト「多様な言語資源に基づく総合的日本語研究の開拓」の推進

機関名 国立国語研究所

代表者 田窪行則・所長

##### 【研究概要】

日本語の研究においては、学術面では、狭く細分化された種々の領域を融合・総合化することの必要性が学会レベルで論じられ、また、社会的には、英語中心のグローバル化世界における日本語研究及び日本語そのものの国際的存在感の向上が緊急の課題となっている。本プロジェクトでは、全国及び諸外国の大学・研究機関との組織的な連携により、個別の大学では収集困難な規模の多種多様な日本語資料を収集・蓄積し、それらの創造的再構築により得られる電子化言語資源を大学及び研究者コミュニティの共同利用に供することで日本語研究の国際化を促進する。同時に、それらの多様な言語資源を分析するにあたって、これまで細分化され相互連携が少なかった種々の研究領域を融合させることによって、新たな総合的日本語研究のモデルを開拓する。研究成果は、国際出版を含む印刷出版物、コーパス・データベース等の電子成果物、専門家向け及び一般向けの多様な催し等、様々なメディアにより全国及び世界に発信する。全国の大学に対しては、新たに開拓する総合的研究モデルを教育プログラム化して提供することにより日本語学・言語学教育の機能強化に貢献するとともに、各種言語資源の包括的活用を可能にする検索システムの開発により共同利用基盤を高度化する。さらに、各地の消滅危機言語・方言の記録、保存を通じて、地方創生・地域活性化に貢献する。

本研究は(a)～(f)の班で実施し、合同研究会・合同発表会を通して研究分野の融合・総合化を図る。

##### (1) 研究テーマ「対照言語学から見た日本語」

a. 「対照言語学の観点から見た日本語の音声と文法」班

b. 「統語・意味解析コーパスの開発とそれに基づく言語研究」班

諸外国語との対照により、日本語の音声・文法の特性を明らかにし、成果を世界の言

語学界に発信するとともに、対照研究のために文法・意味情報とローマ字表記を加えた日本語コーパスを開発・公開することにより、日本語研究の国際化に貢献する。

(2) 研究テーマ「日本語の地理的・社会的多様性」

c. 「日本の消滅危機言語・方言の記録とドキュメンテーションの作成」班

ユネスコ報告（2009年）で言及された国内の消滅危機言語（アイヌ語を含む）並びに消滅危機方言を調査し、それぞれについて文法記述・テキスト・語彙集の3点セットを作成・公開することにより、それらの言語・方言の保存と地域活性化に貢献する。

(3) 研究テーマ「日本語の歴史的変化」

d. 「通時コーパスの構築と日本語史研究の新展開」班

個々の資料の読解・分析を中心とする従来型の研究手法を補完するため、過去の日本語資料を時代別に電子化し、言語変化を通時的に（時系列で）捉えられるコーパスを構築する。これにより、日本語史の研究に新たな研究の枠組みをもたらす。

(4) 研究テーマ「日本語の話し言葉」

e. 「大規模日常会話コーパスに基づく話し言葉の多角的研究」班

独話を中心とする話し言葉コーパスの構築に続き、日常会話の話し言葉を収集・コーパス化し、多様なレジスターの話し言葉を含む研究資源を整備することにより、学術研究だけでなく日本語教育や情報工学等の応用分野での活用を促進する。

(5) 研究テーマ「日本語学習者のコミュニケーション」

f. 「日本語学習者のコミュニケーションの多角的解明」班

外国人（非母語話者）の日本語学習過程とコミュニケーション力を多角的に解明し、日本語教育や教材開発の実践に有用な基盤的材料を提供するとともに、学習者に見られる言語摩擦や社会参加の諸問題の解決にも貢献する。

なお、本プロジェクトは、研究の総合性を高めて効率的に成果を産出するために、広領域連携型基幹研究「日本列島における地域社会変貌・災害からの地域文化の再構築（「日本の消滅危機言語・方言の記録と継承」ユニット）」及び「異分野融合による総合書物学の構築（「表記情報と書誌形態情報を加えた日本語歴史コーパスの精緻化」ユニット）」並びにネットワーク型基幹研究「日本関連在外資料調査研究・活用事業（「北米における日本関連在外資料調査研究・活用一言語生活史研究に基づいた近現代の在外資料論の構築—」ユニット）」と密接に連携して実施する。

## 2 研究成果の公開・可視化

### (1) 報告書・成果論集、シンポジウム、データベース等

#### ①報告書・成果論集

- 1) 英文論文集の国際出版(第2期に開始した HANDBOOKS OF JAPANESE LANGUAGE AND LINGUISTICS シリーズ(ドイツ・De Gruyter Mouton)を完成させるほか、幾つかの共同研究と国際シンポジウムの成果を英文論文集として出版する。)
- 2) 和文論文集の出版(すべての共同研究において和文論文集等を複数冊、全国規模で刊行する。)
- 3) その他の印刷成果物(共同研究で得られた詳細なデータで、市販の出版物や学会誌論文には含めることのできない規模のものを、研究所で刊行する。)

#### ②シンポジウム・予稿集

##### 1) 専門家向け

###### ・国際シンポジウム

成果発信型の国際シンポジウム(研究所全体及び個々の共同研究の主宰による国際シンポジウムを毎年開催する。)

海外学会誘致型の国際シンポジウム: 普段は海外を拠点として活動する日本語研究及び日本語教育研究の国際学会を国立国語研究所に誘致して開催することで、研究の国際化を促進する。6年間に2回程度実施。)

##### 2) 一般向け

NINJAL フォーラム(研究成果を平易に一般社会に伝えるための一般向け公開講演会。毎年一回開催。)

#### ③データベース

歴史コーパス、日常会話コーパス、方言コーパス、日本語学習者コーパス、統語・意味解析コーパスを開発し、それぞれ段階的に公開していく。

#### ④その他

- 1) NINJAL チュートリアル(若手研究者育成を支援することを目的として、日本語学・言語学・日本語教育研究の諸分野における最新の研究成果や研究方法を大学院生・若手教員等に教授する。各地で毎年2回程度開催。)
- 2) 地方セミナー(共同研究プロジェクトの研究内容を様々な形で一般市民に伝えるために、調査地域等、各地で開催する。)
- 3) コーパス活用講習会(言語及び自然言語処理の若手研究者にコーパス活用のための講習会を毎年開催する。)

## (2) 教育プログラム等

第2期の主要な研究成果と第3期の新たな共同研究の成果に基づいて総合的日本語学の教育プログラムを体系化し、全国の大学の言語学・日本語学講座に提供する。具体的には、本研究所が構築する各種のコーパス・データベースや資料収集過程のノウハウを最大限に活用することにより、学問的知識を伝授する従来の教科書とは異なり、学生自らが資料の調査・収集と整理・分析を行い、問題の解決を導き出すことを意図した実践的な教材を開発する。これにより、大学研究者及び研究者コミュニティに対して日本語に関する融合的・総合的視野と新研究領域創出の可能性を示し、学部及び大学院教育の強化に貢献する。

## (3) 展示等

国立国語研究所では物理的な展示は行わないが、共同研究から得られた資料等（音声を含む。）をウェブ上で展示・展開するようにする。

## 3 研究プロセスの国内外に向けた情報発信

- 1) 各種の研究情報や研究成果を随時ウェブで発信する。
- 2) 共同研究プロジェクト（班）ごとに公開研究発表会を毎年度、各地で開催する。
- 3) 総合的日本語学の形成のため、各種共同研究プロジェクトの合同研究発表会「言語資源と言語分析」（仮称）を3年目と5年目で開催するとともに、その予稿集等をウェブ公開することで、研究のプロセスを可視化する。
- 4) コーパス等は出来たところから段階的に公開することで、研究プロセスの全体像を把握しやすくする。

## 4 若手研究者の人材育成の取組み

博士学位を有する若手研究者をプロジェクト非常勤研究員（国語研では「プロジェクトPDフェロー」と呼称。）として雇用し、1つの専門領域だけに限られない多角的指導を行うとともに、国際会議の準備・開催や論文集の編集などのロジスティックな業務に直接的・間接的に係わらせることにより、研究力と実務力・実践力を兼ね備え、国際的にも活躍し得る研究者を育成する。

## 5 全体計画（主要活動）

- (a) 「対照言語学の観点から見た日本語の音声と文法」班
- (b) 「統語・意味解析コーパスの開発とそれに基づく言語研究」班
- (c) 「日本の消滅危機言語・方言の記録とドキュメンテーションの作成」班
- (d) 「通時コーパスの構築と日本語史研究の新展開」班

(e) 「大規模日常会話コーパスに基づく話し言葉の多角的研究」班

(f) 「日本語学習者のコミュニケーションの多角的解明」班

年 度	取 組 内 容
平成 28 年度	<p>(a) 日本語とアジア言語との対照研究を開始。</p> <p>(b) 統語・意味解析コーパスの開発を開始。(a) (b) 合同で、諸言語のオノマトペに関する国際シンポジウムを開催。</p> <p>(c) 消滅危機言語・方言（アイヌ語を含む）の調査を開始。危機言語・方言サミットを開催。</p> <p>(d) 歴史コーパスのデータ整備と部分的試験公開。</p> <p>(e) 日常会話コーパスの元となる会話データの収録を開始。</p> <p>(f) 外国人学習者の発話・作文・理解に関するデータ収集を開始。</p> <p>&lt;全体&gt; 総合的日本語研究のモデル化に向け、プロジェクト間の連携体制と合同研究集会について検討。教育プログラム化の検討を開始。</p>
平成 29 年度	<p>(a) 音声班と文法班で日本語とアジア言語との対照研究を推進。日本語音声に関する論文集を国際出版。</p> <p>(b) 統語・意味解析コーパスの開発と言語学的分析を推進。国際シンポジウムを開催。ムートン社ハンドブックの対照言語学の巻を刊行。</p> <p>(c) 消滅危機言語・方言の調査を推進。ムートン・ハンドブックの方言の巻を刊行。危機方言セミナー、またはサミットを開催。方言の記述・継承に関する書籍を刊行。</p> <p>(d) 歴史コーパスのデータ整備・アノテーションと部分的公開。国際シンポジウムを開催。</p> <p>(e) 日常会話データの文字化とアノテーション。会話コーパスの一部を内部モニター公開。</p> <p>(f) 外国人学習者の発話・作文・理解に関するデータ収集を継続し、学習者コーパスの構築を開始。日本語教育に関する国際シンポジウムを開催。</p> <p>&lt;全体&gt; 総合的日本語研究のモデル化に向け、基幹研究全体が連携した合同研究集会を開催。教育プログラム化の検討を継続。</p>
平成 30 年度	<p>(a) 対照研究の推進と中間まとめを行い、英文論文集を国際出版。日本語音声に関する国際シンポジウムを開催。</p> <p>(b) 統語・意味解析コーパスのインターフェイス（日本語、英語）の開発と、部分的試験公開。研究成果を欧州のジャーナルに刊行。</p> <p>(c) 消滅危機言語・方言の調査と中間取りまとめ。国際シンポジウムを開催。方言の記述・継承に関する書籍を刊行。</p> <p>(d) 歴史コーパスの構築と部分的試験公開。成果の中間まとめ。</p> <p>(e) 日常会話コーパスの構築と部分的試験公開。成果の中間まとめ。</p> <p>(f) 外国人学習者のデータ収集を継続し、学習者コーパスの一部を公開。日本語教材の作成を支援するリソースの一部を公開。中間取りまとめ。</p> <p>&lt;全体&gt; 基幹研究の合同研究成果発表会として「言語資源と言語分析（仮称）」を開催し、ピアレビューと外部評価を実施する。教育プログラムの内容の具体的に検討し、教材開発に着手。</p>

平成 31 年度	<p>各班で、中間自己評価を踏まえて改善。</p> <p>(a) 対照研究の推進、成果発表。成果を欧州のジャーナルに刊行。</p> <p>(b) 統語・意味コーパスの改善・拡充と言語学的分析。</p> <p>(c) 消滅危機言語・方言の調査と言語学的分析。危機方言セミナー、またはサミットを開催。方言の記述・継承に関する書籍を刊行。</p> <p>(d) 歴史コーパスの拡張と部分的試験公開。言語学的分析。</p> <p>(e) 日常会話コーパスの拡張と言語学的分析。会話コーパスの一部を内部モニター公開。</p> <p>(f) 外国人学習者のデータ収集を継続し、学習者コーパスを拡張。日本語教材の作成を支援するリソースを拡張。</p> <p>&lt;全体&gt; 各種プロジェクトの連携・融合により日本語研究の総合化を促進。教育プログラムの教材（一部分）を開発し、試験的に運用する。</p>
平成 32 年度	<p>各班で、最終年度に向けて研究を加速。</p> <p>(a) 対照研究の推進と成果の国際的発信の強化。日本語音声に関する国際シンポジウムを開催。</p> <p>(b) 統語・意味解析コーパスの拡充と言語学的分析、成果発信の強化。</p> <p>(c) 消滅危機言語・方言の調査と成果発信の強化。国際シンポジウムの報告書を刊行。危機方言セミナー、またはサミットを開催。</p> <p>(d) 歴史コーパスの拡張と成果発信の強化。成果を論文集として刊行。</p> <p>(e) 日常会話コーパスの拡張と部分的試験公開。成果発信の強化。</p> <p>(f) 学習者コーパスと日本語教材の作成を支援するリソースを拡張し、成果発信を強化。日本語教育に関する英文論文集を国際出版。</p> <p>&lt;全体&gt; 基幹研究の合同研究成果発表会「言語資源と言語分析」(仮称)」を開催し、成果刊行の準備を行う。教育プログラムの教材（残り部分）を開発し、試験的に運用。</p>
平成 33 年度	<p>(a) 対照研究の終了。論文集の刊行。</p> <p>(b) 統語・意味解析コーパスの全面公開。論文集の刊行。</p> <p>(c) 全国消滅危機言語・方言調査の終了。データの全面公開。危機方言セミナー、またはサミットを開催。方言の記述・継承に関する書籍を刊行。</p> <p>(d) 歴史コーパス完成・全面公開。論文集の刊行。</p> <p>(e) 日常会話コーパスの完成・全面公開。論文集の刊行。</p> <p>(f) 学習者コーパスと日本語教材の作成を支援するリソースの完成・全面公開。日本語教育に関する国際シンポジウムを開催。</p> <p>&lt;全体&gt; 基幹研究全体のまとめとして、「言語資源と言語分析」(仮称)」の論文集を出版。日本語学の総合化に基づく教育プログラムと教材（サンプル）の開発終了。</p>

## 6 計画、報告及び進捗状況の確認

### (1) 年次計画

機関拠点型の実施機関は、毎年度の研究及び事業の計画（以下「年次計画」という。）をとりまとめ、実施機関内の議を経て、総合人間文化研究推進センター（以下「推進センター」という。）に提出する。

推進センターは、総合人間文化研究推進センター運営委員会の議を経て、年次計画を決定する。

(2) 年次報告

実施機関は、毎年度の事業実績報告（以下「年次報告」という。）をとりまとめ、実施機関内の議を経て、推進センターに提出する。

(3) 各機関が設置する外部の評価委員会における進捗状況の確認

実施機関は、客観的立場からプロジェクトの進捗状況を確認するため、年次報告に基づき、各機関に設置する外部の評価委員会による進捗状況の確認を受けるものとする。進捗確認の結果、実施機関が必要と認めるときは改善措置を講ずるよう、プロジェクトに助言する。